

3つの個性的な拠点を中心に 果敢なまちづくりを展開

3つの拠点地区が形成する 新時代の盛岡市

「みちのくの小京都」「杜と水の都」とも称される盛岡市の中心市街地は、東北新幹線停車駅・JR盛岡駅の東側を流れる北上川対岸東方面に開けている。盛岡市は典型的な内陸型の都市だが、北上山地を隔てて三陸沿岸の宮古市にも隣接している（盛岡の中心市街地から宮古沿岸部までの直線距離は約90km）。その北上山地を源流とする中津川は盛岡市の中心市街地を縦断し、盛岡城跡公園（岩手公園）付近で北上川に合流する。中津川は夏には鮎釣りでにぎわい、秋には北上川河口から200kmを旅してきた鮭が産卵のため遡上する「まちなかの清流」として平成の名水百選にも選ばれている。

中津川・北上川の合流部には、岩手・秋田の県境をなす秋田駒ヶ岳を登って盛岡駅西

口に達する雫石川も合流している。3本の1級河川が地味豊かで広大な低地帯を形成しつつ、市の玄関口のすぐ横で合流する。まさに杜と水の都であることが分かる。

そうした環境を背景に長年掛けて育まれてきた盛岡の町並みは美しい。特に中津川兩岸に広がる旧城下町（旧盛岡藩）地区には、盛岡城跡公園を中心に、江戸時代から続く商家、明治・大正時代に建てられた土蔵、レンガ造りの銀行、民家・番屋など各種のレトロな建物が今も現役のまちの風景として脈々と息づいており、石川啄木や宮沢賢治にゆかりの観光資源などとともに、年間を通して多くの観光客を引き付ける要因となっている。

盛岡市は明治22年の市制町村制施行に伴い誕生した全国39の市の一つ。つまりわが国で最も古い市の一つで、今年は市制125周年の節目に当たる。人口約30万人の北東北の中心都市（平成20年に中核市へ移行）として、岩手全県の人口約128万5000人の37%強

谷藤裕明
盛岡市長



に当たる圏域

人口約48万人を抱える盛岡広域圏（8市町）の中心市として、大きな存在感を放っているといえる。

しかし、その旧城下町地区の完成された町並みは、北東北の中核都市、広域圏の中心市としての役割を多角的に担うための新たな都市的集積を構築するには不向きで、昭和のころから新都心建設の必要性が論議されていた。そうした背景の下、盛岡市が施行主体として実施した盛岡駅西口地区（旧国鉄盛岡工場跡地および周辺35・6ha）開発計画は、平

成3年度の都市計画決定を皮切りに着々と進められてきた。

ハード面における実質的施行期間は平成5年度～23年度までで、西口地区の建設事業はほぼ完成したといっているだろう。

併せて盛岡駅西口地区と雫石川を挟んで対岸に位置する盛岡南地区では、平成2年度から独立行政法人都市再生機構が推進する土地画整理事業「盛岡南新都市（盛岡南地区）」（約313.5 ha）が進められ、平成25年度でやはり事業の大枠が完了した。

盛岡南地区は主に流通大手各社が運営する



新都心の役割をもつ盛岡駅西口地区（中央のビルは20階建てのマリオス）

大型ショッピング施設、各種の博物館・美術館施設、学校、各種研究機関、住宅地などによる新市街地が形成されている。既存の中心市街地と盛岡南地区の間にある盛岡駅西口地区は、盛岡市の新たな玄関口であり、地上20階建てのシンボルタワービル「マリオス」を中心に、職・住・遊が一体となった駅近の魅力ある都市空間が形成されている。西口地区では同時に、下水道や変電所の廃熱を熱源とする地域冷暖房システム（マリオス内に熱供給センターを配置）を備えるなど、エコシティとしての先進的な取り組みも各種実施されている。



北上川越しに遠望する冠雪の岩手山は盛岡市を象徴する風景（冬）

西口地区・盛岡南地区の開発事業は「盛岡城築城によるまちづくり以来の大規模な都市開発」事業とも評されている。実際、これだけの規模の開発がほぼ同時進行し、共に完成



旧城下町の街並みを四季折々に彩るハンギングバスケット



旧城下町には登録文化財が目白押し（旧消防署＝紺屋町番屋）

に至ったという事実は、先人による着手までの長い前史と併せ、「盛岡城築城以来」の評にふさわしいプロジェクトといえるだろう。

新たな広域連携モデルと I・L・C誘致への動き

「旧城下町地区に西口地区、そして盛岡南地区と、盛岡市はこれで個性の違う3つの拠点を持つ都市となったわけです。盛岡市は平成18年に中山間地の多い玉山村と合併して、面積がほぼ倍増したため、開発が可能な空閑地はまだ豊富にあります。今後はさらに北東北の中核都市、また盛岡広域圏の中心市にふさわしい、より大型のプロジェクトの受け入れも十分に可能になったと考えております」

そう語るのは谷藤裕明・盛岡市長だ。谷藤市長は平成15年の市長就任以来、危機的状況にあった市財政の再建のため、積極的な行財政改革を断行し、着実に成果を挙げてきた。一方で広域合併も視野に入れた50万人都市構想を提唱し、さまざまな観点からその実現を模索してきたことでも知られている。合併構想の今後についてはともかく、盛岡市は今年5月、将来的に地方中枢拠点都市となることを視野に入れた新たな広域連携モデル構築事業（総務省委託事業）にも、広域7市町の了承を得た上で応募している。前述したように盛



市内をゆかた姿で歩くと多彩な特典が受けられる「ゆかたのまち盛岡」キャンペーンを今年初めて実施（7/19～8/16、写真は市職員）

岡広域圏（総人口約48万人）において、盛岡市の3つの拠点を持つ都市構造は既に「広域圏全体の中心市街地」としての実力を十分に備えている。そうした観点からも、この新たな広域連携モデルの構築に向けた今後の推移は大いに注目されるところだ。

折しも昨年8月には、「次世代加速器（国際リニアコライダー＝I・L・C）の候補地が北上山地に決定」という、世界的に注目度の高いビッグニュースがマスコミにぎわせた。

盛岡市が広域7市町の了承を得て応募した総務省の新たな広域連携モデル構築事業の主要目的には、圏域全体の経済成長のけん引のほか、高次の都市機能の集積、圏域全体の生活関連機能サービスの向上などが挙げられているが、具体的な事業としては、圏域内の救急医療体制の再整備、IT産業の育成などとともに、このI・L・C誘致を見込んだ人材育成事業なども含まれている。

「I・L・Cの候補地が北上山地に決定されたのは、30kmもの延長距離が必要な実験施設を



市民病院に親しんでもらうべく毎年開催の「市民病院デー」は市民に大好評（今年で7回目）

造るのに、強固な花崗岩が50km以上連続して分布し、しかも活断層のない北上山地が世界的に見ても一番適しているからだとお聞きしています。同時に日本には90年代からI・L・Cの分野で世界をリードしてきた、優れた研究者や研究機関が多いことも、要因の一つだと思われます。I・L・Cの実験施設が北上山地にできるということは、世界の科学者、技術者が集まり、関連研究機関の集中できる新拠点が必要になるということでもあります。実験施設および研究拠点は、岩手県南部が想定されていますが、盛岡広域圏においても、科学者や技術者の受入れ、関連産業の誘致など、今後の圏域のまちづくりには計り知れない好影響が、多角的に現れるのではないかと期待し



大慈寺前の共同井戸（青龍水）から鉾屋町の街なかに引かれ、今も生活用水として使われている大慈清水（平成名水百選）

ています」（谷藤市長）

盛岡市では、I・L・C誘致推進のため、関係各課の人材を集めた国際リニアコライダー推進事務局を今年4月に発足させた。I・L・Cおよび付随する各種事業の誘致に関しては、盛岡市（盛岡広域圏）に限らず、北上山地に近い東北地方の有力都市は皆それを視野に入れ、さまざまな取り組みを講じようとしている。そうした状況下、3つの異なる個性の拠点が揃った盛岡市がそのポテンシャルを駆使しながら、広域圏を舞台にI・L・Cに関する各種誘致活動など、地方中枢拠点都市を目指す立場の都市として今後どのようにダイナミックな動きを見せていくのか、興味が尽き



地域の交流拠点として、新たな観光交流拠点として期待される「もりおか町家物語館」（工事中の写真）

都市化の進んだ個性の違う3つの拠点地区とともに、味わいのあるつなぎ温泉、広大で牧歌的な雰囲気の中山間地（玉山地区）などを備えた盛岡市の環境は、都市観光のコンテンツにも事欠かない。さらに今年の7月28日、鉾屋町にオープンした「もりおか町家物語館」は、盛岡市の都市観光に加わる新たなコンテンツとして注目される。

同館は旧岩手川鉾屋町工場跡地を活用し、江戸末期から昭和初期に建てられた4つの建物（江戸時代の浜藤の酒蔵、盛岡町家づくり

地域資源を活用した 観光・物産の振興

の母屋、昭和初期の土蔵を活用した文庫蔵、大正時代の酒蔵の大正蔵）を改修した観光交流拠点施設だ。盛岡の歴史的な町家の暮らし、文化、鉾屋町を含む大慈寺地区の暮らしなどを紹介する展示のほか、イベントスペース（浜藤の酒蔵）としての活用もできる。

鉾屋町を含む大慈寺地区（大慈寺をはじめ、旧盛岡藩時代の南の寺院群が立地）は、前述した中津川・雫石川が北上川に合流する地点より少し下流、中心市街地から見れば盛岡城とは中津川を挟んだ対岸に位置している。北上川の舟運が盛んだった時代（江戸時代から昭和初期）に大いに栄えた地区でもある。

「もりおか町家物語館」はその歴史を今に伝える施設だ。同時に周辺一帯の町並みが全体



旧岩手県立図書館を活用した街なか観光拠点施設「もりおか歴史文化館」（展示は「チャグチャグ馬コ」）



盛岡市民が燃える真夏の風物詩「さんさ踊り」(ミスさんさ踊り)



盛岡さんさ実行委員会(会長・谷藤市長)主催の和太鼓同時演奏で見事、2度目の世界記録達成(今年6月)

川啄木や宮沢賢治ゆかりの文化財も点在する。盛岡のまちの暮らしの歴史とともに、杜と水の都の雰囲気を感じ、現代の盛岡市の顔である3つの拠点地区すべても踏破できる。非常にドラマチックな街歩きのパターンコースといえる。

「盛岡市はまた北東北全域をエリアとする広域観光の拠点でもありま

す。宮沢賢治の故郷・花巻や小岩井農場などはもちろん、世界文化遺産に登録された平泉などとも既に連携し、盛岡市だけでなく、北東北全域の広域観光の振興にもさらに力を入れていきたいと考えております」(谷藤市長)

的に昭和レトロの雰囲気満ちている割に、これまで観光スポットとして注目されてこなかった地域でもある。しかし「もりおか町家物語館」ができたことで、盛岡駅東口から北上川を渡って旧城下町地区へ、旧城下町から中津川を渡って大慈寺地区(鉾屋町)へ、大慈寺地区から北上川を渡って盛岡南地区へ、盛岡南地区から雫石川を渡って盛岡駅西口地区に至るというコースが成立する。そのプロセスには「もりおか歴史文化館」をはじめ数多くの歴史博物館、美術館、登録文化財があり、石

盛岡市では現在、特産品だけでなく、まちを構成する雰囲気、文化遺産なども含めた都市としての暮らしやすさなどにより選ばれたまちづくりを目指した「盛岡ブランド」の推進に取り組んでいる。また、盛岡の魅力や価値を市内外に発信していく「シティプロモーション」の視点も盛岡ブランドの重要な取組といえそう。

鬼退治の由来ある さんさ踊りと復興支援

盛岡市は今年も例年通り、東北地方の夏祭りシーズンの幕開けとして知られる「盛岡さんさ踊り」(第37回、8月1日〜4日)で大いに盛り上がった。報道によるとこの4日間の観客は136万5000人。昨年より6万人以上上回る過去最高を記録したそう(踊りの参加者は4日間で256団体、3万4500人)。

取材で盛岡市を訪れたのは、さんさ踊り本番の約2週間前だったが、夕刻が近づくとも市内各所で老若男女が太鼓を手に歩く姿が見られ、広場では実際、小学生チームが熱心に練習する風景を見ることができた。イベントと



つなぎ温泉近くにある「盛岡手づくり村」には地場産品、盛岡ブランドがいっぱい

しての「盛岡さんさ踊り」の歴史は40年に満たないが、「さんさ踊り」そのものは江戸時代から盛岡の人々に親しまれ、地域ごとに少しずつ個性の違う「さんさ踊り」が伝えられてきたという。このようにもはや盛岡市民の血肉と化しているかのようなさんさ踊りには、もともと鬼の退散を喜んだ里人の踊りという意味がある。

坂上田村麻呂の故事を持つ東北地方の夏祭りには青森県のねぶた（ねぶた）など鬼退治の要素の濃厚なものが少なくないが、平成23年3月11日の東日本大震災以降、東北地方の祭りには災厄の退散を願う思いがより一層、濃厚になっているのではないだろうか。

内陸部に位置する盛岡市は沿岸の市町村に比べ、直接的な被害は少なかったとはいっても、震災の記憶は今もなお市民の間に生々しく残っている。

また盛岡市内には今も1400人以上の被災者（ほとんどは沿岸部の方々）が故郷を離れて暮らしている。盛岡市では、震災直後から沿岸市町村への復興支援として、避難所の運営支援等のための短期の職員派遣や被災市町村の行政機能回復のための中・長期の職員派遣などを行ってきたが、そのうち中・長期の職員派遣では、延べ111人（平成26年度は延べ23人）が沿岸8市町村に派遣され、復興支援に従事している。今回の取材では「もりおか復興支援センター」を訪問し、被災者の方々の暮らしぶりの一端を教えていただいた。避難生活も3年目を過ぎると個人差はあ

るにせよ、心身に蓄積するストレスにはやはり大変なものがあるようだ。復興支援センターではそうした人々への心のケアのため、事あるごとに訪問活動を実施している。

「盛岡市では震災が発生して以来沿岸被災地から避難してきた被災者の支援に努めてきました。そうした被災者の交流拠点および支援活動の拠点施設として『もりおか復興支援センター』を開設し、今も活用していただいております。また被災地から進学のため転入してくる学生を受け入れる学生寮、復興支援団体のシェアオフィス、遠隔地から来るボランティアの宿泊施設などを合わせた複合的拠点施設として『もりおか復興推進しえあハート村』を開設し、現在に至っています。そのほか、考えられる範囲の支援はすべて行っておりましたが、被災者や被災地へのきめ細かな支援にはもちろん、今後、より一層、力を入れていきたいと考えております」（谷藤市長）

もりおか復興支援センターでは、被災者に雑巾を縫ってもらって買い取る「紡ぎサロン」や、みんなで集ってお茶を飲みながらしゃべり合う「お茶っこ飲み会」、ミニコンサートなど多彩な活動



「もりおか復興支援センター」に集う被災者の皆さん（上）と、センター前に並ぶそれぞれの出身地を記した復興支援の幟（下）

を行い、コミュニケーションが不足になりがちな避難生活への側面支援（ケア）も実施している。盛岡市はさらに「市民による提案型復興推進事業」を実施するなど、市民協働による復興支援活動も盛んだ。

「北東北の中核都市として当然の役割」（谷藤市長）とはいえ、盛岡市のこうした幅広くきめ細かな活動は、今も続く東北地方全体の復興活動において心身ともに大きな推進力になっているといえる。

これまで見てきたように、盛岡市の実践する事業には、ジャンルの別を超えて、中核都市としての自覚が端々にみえつつある。現代における広域圏の在り方を、いろいろな意味で、改めて考えさせられる取材だった。

（取材・文 遠藤隆／取材日平成26年7月15日）